

# 悠久の京を訪ねて Part III Vol.2



京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。  
京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。  
私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

## 清水寺の火災と再建の歴史 — 国宝清水寺本堂(清水の舞台)の発掘調査から —

### ■ 清水寺の建立と再建

清水寺は、奈良時代の終わり頃に草堂そうどうが営まれ、平安時代の初めに坂上田村麻呂さかのうえのたむらまろにより建立されたといわれています。その後、室町時代から江戸時代までたびたび災害や戦火に見舞われましたが、多くの参詣者や時の権力者の寄進により再建されてきました。

本堂は、文献などの記録に残る限りでは、平安時代後期から江戸時代前期にかけて、9回焼失しています。現在の本



堂の床下の発掘調査風景：地表には埃のような土が厚く積もる

堂は、江戸時代前期の火災の後、徳川幕府三代將軍家光によって再建されたものです。



### ■ 火災と再建の歴史を語る本堂の床下

本堂床下の地面は急な斜面になっており、その上に埃のような土が厚く積もっていました。平成23年度に行われた発掘調査では、火災があったことを示す焼土、火災の後、建物基礎の整地が行われたことを示す盛土、軒平瓦などが見つかりました。

焼土は、盛土を挟んで上下に3層認められるところがあり、少なくとも3回の火災があったことがわかりました。出土した陶磁器片などから、それぞれ江戸時代前期の火災、室町時代中期の応仁・文明おうにん ぶんめいの乱の兵火、室町時代前期の火災に比定することができます。これらから清水寺の火災とその後の再建の歴史を垣間見ることができます。



本堂床下の礎石と火災を示す焼土、その後建物基礎の整地が行われたことを示す盛土